

駒次郎語録と所作

藤 村 和 芳 (52期)

○ シャァかるッぞ

古語の「しまく」—— 風が激しく吹きまくるさま —— から転訛し、博多弁では「しまかれるぞ」といい、激しく続けざまに叩く（殴る）意で、喧嘩の前口上で相手に脅しをかけるときによく使ったものである。

言葉の言い回しは巻き舌調に早口で勢いよく言うと「シャァかるッぞ」となり、彼が言うとき脅しどころか親しみさえ感じる。

○ 忍耐と寛容

彼は某大学で講師として会計学を教えていたが、学生の出来の悪さにほとんど降っていたようで「忍耐と寛容の精神が必要だ」といつもボヤいていたが、奥さん内緒のその講師料でよく一緒にのんだものだ。

○ 人間どっか取柄があるもんじゃ

どんな学生にも日頃の会話の中で「人間どっか取柄があるもんじゃ」と愛情たっぷりの表情で諭していた。

○ 近代監査報告書論

1975. 3月、彼の著書「近代監査報告書論」出版記念の席上、友人代表の祝詞の中で、「この本は、私には終生中身を読むこともなく、後生大事に枕元に置いて寝付きの悪い夜の一助となるであろう。不眠症の方には是非おすすめしたい一冊である」と挨拶して、彼の恩師や教師仲間に反感をかったことを覚えている。

○ 若き日の阿房列車

1950、全国大学野球選手権大会出場のため、東京遠征でのこと、—— 国電・某駅のプラットホームで左右の手にボストンバック、背中には食料を詰め込んだリックサックという扮装で、車内満員のため、背面から乗車していた要領の悪い彼だけが、背負ったままのリックは車内、体はホームの土の上という状態で発車のベル、汽車は確実に動き出し、徐々に加速され、さあ大変！彼の体はカニの横這いの形のままプラットホームを30m位は併走したであろうか、あと何歩かのところで体とバックごとホームに放り出され、やっとのことで難を逃れたとは云へ、命拾いの瞬間であった。どこへ行っても事の多い漢である。

○ Southpaw

酔っ払うと、きまってグラブのような左手で、例の「シャァかるッぞ」と言いながら先輩・後輩かまわず相手の頭を連発して叩く。かなり痛く腹が立つときがあるが、酔えば天国、本人は至って得意気である。

○ 碧波寮の舞台

碧波寮の寮祭 ― 昔は舞台へあがってよく踊った。彼が^{じかた}地方（うたう役）でわたくしが立ち方である。本来、踊りは歌詞によって振付けがされるものなのに、一杯ひっかけているせいもあり、決まって途中から一番と二番の歌詞を混同して歌うので踊れる訳がない。「もとい！」と再三のやり直しで最後まで、まともにやれたことがない。だが、これが却って爆笑を誘い会場を賑わしたものだ。張本人は満面の笑みをうかべ“したり顔”である。なんとなく腹が立って仕方がなかった。（こげなとき、博多弁じゃ「臓の切ってきりわく」という。）

○ 持ち芸

1. 「拙者は宮本武蔵」 ― とある片田舎の尼寺 トン、トン トン、トン、トン 拙者は宮本武蔵 一夜の宿を所望いたす……から始まる男役と女形の一人二役で、卑猥な台詞と所作が交互に目まぐるしく動く彼の当たり役であるが、台詞忘れや所作のミスなど最後までスムーズにいくことは先ずなかった。女形の田中 忍氏とのコンビでやることが多く、これも後半乱れるがその掛け合いは、かなり面白く評判もよかった。
2. 「歌舞伎・切られ与三の名台詞」 ― しがねえ恋の情が仇 ― の語りは、くろうと肌でかなりのものであったが、晩年は余りやらなかった。
3. 「はかたにわか（二〇加）」 ― 酔っ払うと肝心な結末の落ちが決まらない。本人はうまく落としたつもりが落ちてない。出来の悪いものの中から一つ……浦島太郎 ― （浦島伝説にもとづく玉手箱が、ほゝ〜ら閉まったろう）を「う〜らシマッタロウ」で落としたつもり。これは彼の中ではいい方の部類で、挙げるときりがなく又、彼を傷つけることにもなるので、この辺で打ち止めとする。

○ 駒次郎と一緒に歌おう その愛唱歌と昭和のころ！

彼を音痴ときめ付けてしまうと可哀そうな気もするが、それに近い感じで、ちょっと灰田勝彦に似た鼻にかかった歌声が偲ばれる。そう言う私も似たり寄ったりでお互いに自分の方がうまいと思っているから始末に負えない。そして彼は自分自身の歌唱力には幸い気づかずには逝ってしまったが、しかし歌は大好きだった。

やっぱりモダンだった昭和初期の歌謡曲、戦中はびこった軍国歌謡、打ちひしがれた心を慰めた戦後の流行歌等々、中洲の流し「マー坊」のバンジョーで折々の歌とともに歩んだ少年駒次郎、青年藤村の昭和の素晴らしい懐メロへの熱い想いがほとばしるようである。

歌は心の点滴、三分間のドラマとも言われるが、彼の人生そのもののようであり、ここに駒次郎の名調子で、歌謡名曲

を感涙回顧しながらそのいくつかを紹介してみよう。

駒次郎の数々ある愛唱歌の中でも一番好きな唄で灰田勝彦風にマネして歌うと、駒次郎の音声とダブリどうしてもハナの中がおかしくなるのでこの辺で止めよう。

前・間奏ともすばらしいが、特に前奏の旋律がなんとも言えない。

♪ウン、チャン、チャ、チャ、ウン、チャカ、チャン、チャン、チャン。

この前奏だけを覚えるために幾度、中洲に通ったことか。

あとは一気にいこう。「新妻鏡」の主題歌「目ン無い千鳥」、藤山一郎の「長崎の鐘」、鶴田浩二の「傷だらけの人生」、昭和39年頃、鹿児島短大で教鞭をとっていた関係で、地元の「南国情話」、北島三郎の「薩摩の女」、博多よかろう会の連中とよく歌った「戦友の遺骨を抱いて」・「福岡市歌」、中洲の軍国酒場アンカーでは^{ひとひとふたページ}112頁「梅と兵隊」・「流砂の護り」、やはり若駒会の愛唱歌集にもある村田英雄の「九州男子」は外すことは出来ないだろう。忘れかけ、最後になったが、村田英雄の「王将」の歌詞の中に「女房の小春」とあるところを、自分の最愛の妻・吟子（お吟）に置きかえて唄ったり、晩年は内藤国雄の「おゆき」—— 持って生れた運命なら —— と彼独特の鼻にかかった節まわしでよく唄っていた。まだまだあって名残りが尽きないがこの辺でお開きとしたい。